

アブデュルハミト二世と世紀轉換期のオスマン帝国

——ヒジャーズ鉄道を中心に——

永 島 育

はじめに

一九〇〇年九月一日、アブデュルハミト二世のスルタン即位二五周年記念日。ダマスクスでは、このオスマン帝国の主要都市を発してイスラームの聖地へ至る鉄道の建設が開始されていた。ヒジャーズ鉄道と呼ばれるこの鉄道は、八年後の九月一日に全線が開通し、帝都イスタンブルと聖都メデynaは近代的な輸送手段によって結ばれることとなった。同鉄道は第一次世界大戦の末に廃止されたが、聖地への巡礼者を運んだことや全世界のムスリムからの寄附とムスリム労働者によって建設されたことから関心を集め、現在まで精緻な研究が積み重ねられている。¹⁾ 先行研究

においてヒジャーズ鉄道は宗教的・政治的な観点から注目され、世界史的な文脈に位置づけられている。まずは問題の所在を明確にする為、年表によって建設時期ヒジャーズ鉄道の歴史を確認する。

年表を見ると、毎年九月一日、乃ちアブデュルハミト二世のスルタン即位記念日にヒジャーズ鉄道の区間開通がなされていることが分かる。同鉄道がスルタン即位記念日に必ず開通されるべきことは、オスマン帝国で法的に決定されていた。³⁾ その即位記念日が如何なるものであったかは、左記⁴⁾に示すように遠く日本にまで伝えられていた。

土人格皇帝アブダル、ハミッドは一八七六年八月三十一日の登位なるを以て本年九月一日を以て在位二十五年祭を挙行せられ、各国より特に大使を差遣して式に列

〈建設時期ヒジャーズ鉄道年表〉²⁾

1904	1903			1901				1900	
9	9	7	4	11	9	12	9	9	5
1	1	1		19	1	1	1	1	2
アンマンーマアーン間 (一〇二キロ?) 開通	ザルカーカトラーナ間 (一二四キロ) 開通	ダマスクスーダルアー間 (一二四キロ) 開通	寄附委員会が公共事業省影響下のハミディエ・ヒジャーズ鉄道財務局へ改組	本線と地中海のハイファ港を結ぶ支線の建設開始 (ハイファ支線で建設資材の運搬力強化を狙った)	ザルカーカトラーナ間 (二二三キロ) 開通	ザルカーカトラーナ間 (二二三キロ) 開通	ムザイリブーダルアー間 (一一キロ) 開通	高額の寄附者のためのヒジャーズ鉄道記念章でできる	ダマスクスにてヒジャーズ鉄道建設開始の祝典が開かれる

アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

1908	1907	1906		1905	
9	9	5	2	12	9
1	1	1	15		1
アルハウラーメディナ間 (三三三キロ) 完成	ヒジャーズ鉄道ダマスクスーメディナ間の開通 式が両市で行われる	マアーンータブーク間 (二三三キロ) 開通	イギリスのイスタンブル近海への艦隊派遣 (圧力によりオスマン帝国軍撤兵)	オスマン帝国軍がシナイ半島ターバ要塞占領 (イギリス・オスマン国境係争)	ハイファ支線 (一六一キロ) 開通

せしめたり。此の如き(こ)とは回々教の常例に非す、今回を初とすと云ふ。皇帝は紀念として君子坦丁堡(コンスタンティノープル)に大学校を起し、又病院及医学校を起すの計画にして其の規模は欧州第一なりと云ふ、又市中の処々に噴水池を造り、独逸皇帝よりも噴水池一箇所を寄附せられたり、皆市民の飲食に供する為めなり。又皇帝は全国人民に課してヘヤズ(ヒジャーズ)に達する電信線を架設し、並にダマスカスよりメッカに到る鉄道を敷設し以て此の大祭の紀念と為すの計画なり。

即位二五周年記念日のオスマン帝国を巡る報道では大

学、医療施設、噴水池、電信、さらにヒジャーズ鉄道といった近代的公共事業の推進が明白に示されていた。同鉄道開通式と、こうした即位記念日が計画的に結び付けられている以上、そこには何等かの意図があるべきである。しかし先行研究でこの事に触れるものは皆無である。そこで本論では、即位記念日に鉄道開通式を行った理由、さらにこうした行為がオスマン帝国とスルタンに生み出し得た利益について、主にイギリスとロシアの新聞史料に依拠して検討することとする。本論はこれを以て、中世来の国家であるオスマン帝国が鉄道という極めて近代的な技術を如何に利用したかを明らかにするものである。

本問題の追究の為、近代における即位記念日のような祝典の意義を、該当分野の先行研究から明らかにし、分析概念を明白にする。まず祝典研究の古典として「伝統の創造」⁶概念は大いに有用である。また、祝典の背景を知るには「正統化」⁷概念が有効である。前掲二つの分析概念は、近代オスマン帝国史研究に転換をもたらしたオズベキヤデリングルも大いに参照している。⁸さらに、ギアツは正統化には「中心」が必要であると説いた。⁹これは社会にとって重要な行為が行われる場所、ないしは重要な意味を持った人や物、概念を指しており、同時に複数の「中心」が並列され得る。さらに、参勤交代の「行列」観の変更を迫る渡

辺浩の研究¹⁰は非常に示唆的である。「中心」間を巡回する飾り立てられた「行列」は、非「中心」の者にも「中心」の壮麗さを視覚的に伝える効果を持つていると同時に、「中心」の優位性に意識を向けさせるものでもあるとされる。そして「中心」も「行列」も同じ「空間」で為されるものである。石井規衛はソ連成立への研究¹¹の中で、正統化実行時には必ずそこに実行される対象が想定されるはずであると、その対象とはあたかも演劇の観客のようなものであり、正統化実行主体は演劇の演者のようなものであるとしている。演者は舞台の装置を利用して、観客席も含めた演劇「空間」に向けて演技をするのである。これらの分析概念を適宜利用し、問題の追及に入る。

一、ヒジャーズ鉄道とスルタンを巡る言論

アブデュルハミト二世は一九〇六年、回想録でヒジャーズ鉄道について左記の様に触れている。¹²

かねてより余が夢見ていたヒジャーズ線がついに実現する。：：メッカ鉄道は、余らにまだ発展できる見込みがあり、余らの事業を妨げるためにあらゆる手段へ訴えるイギリスの失敗に、余が立ち会えるという証明になった。建設が間もなく終わるメッカ線が完工した

後には、スエズ運河への必要性はなくなるであろう。イスタンブルは、神聖なるメッカとメディナの街へ鉄道で結ばれるであろう。こうした形で、この地へ必要ならば軍隊を安全裡に送ることが可能になるであろう。

さらに一九〇〇年に「ヘジャーズ鉄道の」重要な点はムスリム間の連帯がとて強化されることである。イギリスの反逆やペテンはこの固い岩にぶつかってバラバラになってしまうが⁽¹³⁾いとスルタンが語ったことから、彼と同鉄道への期待は三点に集約できる。つまり、オスマン帝国の発展可能性の具体化、ヒジャーズへの軍事統制力強化、ムスリムの連帯強化である。そしてそれぞれがイギリスへの対抗意識から来ているものであった。そもそも当時のオスマン帝国・イギリス関係は、一八八二年のイギリスによるエジプト保護国化を主な契機として悪化していた⁽¹⁴⁾。さらにスルタンは、イギリスが一部のアラブ系臣民の民族主義を刺激して叛乱を起こさせていると認識しており、⁽¹⁵⁾帝国領土へ野心を持つイギリスに如何に対抗するかがスルタンの課題であった。建設開始当初、そのイギリスは同鉄道に特別な関心を払うことはなかった⁽¹⁶⁾。しかし、一九〇六年にエジプト領シナイ半島近傍・紅海沿岸のアカバ湾への支線建設計画に伴ってオスマン帝国が付近の要塞に派兵し、

アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

事態がイギリスとの国境紛争に発展するに及んで、ヒジャーズ鉄道は急速に注目を集めるようになった。紛争解決直後のタイムズ紙記事⁽¹⁷⁾にある言葉は、イギリスの同鉄道への見方を示している。

ヨーロッパ人の言によれば、エジプトには紛争の原因となる主要素が三つあるという。現スルタンとユルドゥズ派閥による「エジプトを統治する」副王家とイギリスのエジプト占領への敵意、エジプト人抵抗勢力が十年間に亘って唱えてきた民族主義としての汎イスラーム主義、シリアにおけるトルコ軍強化とヒジャーズ鉄道の建設によるエジプトの相対的弱体化である。

イギリスにとって重要なインドへのシーレーンが脅威に曝され得ることを示したのが、オスマン帝国との国境紛争であった。こうしたヒジャーズ鉄道へのイギリスの危機意識は、アブデュルハミト二世時代にオスマン帝国へ接近したドイツへの危機意識でもあった。一八八〇年代以降、積極的なオスマン帝国への投資により、ドイツはオスマン帝国債保有率ではイギリスを抜き去っていた⁽¹⁸⁾。とりわけ鉄道への投資は著しく、ドイツ資本によりオスマン帝国の鉄道網は急速に整備されていった⁽¹⁹⁾。こうした経済面での進出に並行して、カイゼル・ヴィルヘルム二世のオスマン帝国訪問など、政治面でも関係は深まっていた⁽²⁰⁾。オスマン帝国軍

制改革の為にドイツから派遣されたフォン・デア・ゴルツ將軍は「ペルシア湾への鉄道交通構築が、ヒジャーズ鉄道の戦略的完全性をもたらすであろう」と指摘していた。ペルシア湾とはイギリスのシーレーンを扼するドイツ資本のバグダード鉄道の終着地であり、ヒジャーズ鉄道はドイツの世界戦略の一部であった。こうした背景もあってイギリスは同鉄道に脅威を感じていた。⁽²²⁾このように、同鉄道建設を巡る英独の言論を整理すると、同鉄道が後の世界大戦に至る展開を映し出すものであったことが分かる。

これまでヒジャーズ鉄道の政治的な側面を見てきたが、ムスリムに対して同鉄道建設は左記の史料のように呼び掛けられていた。

神のご支援によってこの鉄道の建設が完了した暁には、巡礼を行えない者や道中の混雑や困難に耐えられない者の全てが最大限の気軽さと快適さで巡礼を行い、預言者の墓を訪れ、この地で望むものを売り買ひして手に入れられるはずである。従ってムスリムは個人的に、財政的に、支持の意見を表すことによって鉄道建設を支援すべきである。

つまり同鉄道は巡礼の義務を容易ならしむるものであると宗教的に説明され、その聖性に対し寄附をするよう呼びかけられていた。ムスリムに寄附を呼び掛ける委員会は帝

国内のみならず、インド各地にも展開し、在地官僚やウラマーを動員して精力的に活動を行った。⁽²⁴⁾積極的な寄附により、一九〇九年頭までの八年半での調達資金総額の二八・四パーセントが寄附により賄われ、国外からの寄附は九・五パーセントであった。⁽²⁶⁾これは同鉄道の経営利益の約五倍に及んでいた。ヒジャーズ鉄道のこうした宗教的な側面は、アブデュルハミト二世の政治戦略に関係深いものでもあった。

アブデュルハミト二世統治期のオスマン帝国を特徴づけるもののひとつに、汎イスラーム主義政策がある。ロシアの東洋学者バルトリドは一九一四年に「汎イスラーム主義における」一つの政府ないしは連邦としての全ムスリム世界の政治的団結という理想は、今日、もしくは今後とも、常に宗教的教義としてではなく政治的ドクトリンとして表われ、多くは明白に政治的な目的の達成のための手段として見出される」と述べている。まさしくバルトリドの指摘通り、スルタンは政治的な目的達成の為の手段として宗教感情を利用していた。露土戦争の敗戦に伴うバルカンのキリスト教徒民族独立により、オスマン帝国では多宗教多民族の臣民を一つの「オスマン人」と見做す運動の限界が示された。さらにこの敗戦は、帝国保全への民族主義の弊害を改めて示すものでもあった。⁽²⁸⁾つまり多宗教多民族を

含む普遍的な思想も、あるひとつの民族性に注目する思想も帝国を存続させる支柱たり得ないのであった。スルタンは「（今やムスリムが大半の）帝国は（イスラームの）宗教と信仰の国であり、かくあり続けるであろう。もし宗教への理解が崩壊したなら、帝国の終わりが来たと言い得るのだ」と考え、帝国に残った多様な民族集団の一体性の根拠をイスラームに求めていた。つまりスルタンはイスラームを正統性の中心に据え、帝国の保全を計っていた。しかし、スルタンがイスラームをただ利用したのではなかったことは、愛国心について語った史料から明白である。

ヨーロッパで少し思想を齧った若者は、時々愛国心について演説し始めている。しかし帝国で愛国思想が計画の第一に来るべきではない。信仰とカリフへの愛が第一に、愛国心が第二にあるべきである。……イギリスは余の権力を揺るがすことを目的に、イスラーム諸国で愛国思想を広めている。……エジプト人の愛国者たちは気が付かない内にイギリスに騙されていて、イスラームの力を、カリフの尊厳を揺るがしている。

自身がオスマン帝国のスルタンとしてよりも、イスラームのカリフとして見做されるべきとしていた³¹アブデュルハミト二世は、イスラーム国家たるオスマン帝国とイスラームそのものにおいても、スルタン（＝カリフ）個人が「中

アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

心」に来るべく考えていた。列強の内政干渉や財政危機といった国際社会の荒波の中での、スルタンを「中心」とする帝国の国体護持は、スルタンの施政の目標であった。その目標の為、スルタンは富国強兵に向けて近代化を推進するとともに、列強植民地下のムスリムと連帯して膨大なムスリム人口を抱える列強を圧迫するという巧妙な外交政策を行っていた³²。ムスリムの連帯が列強に与える脅威は、スルタンが「カリフの一言は聖戦を起こすのに十分である。これはキリスト教徒にとって大事件であると言える」と語る所から明白である。アブデュルハミト二世の「汎イスラーム主義」とは換言すれば、スルタンを「中心」としたイスラームに基づく近代帝国建設ということになる。

アブデュルハミト二世がイスラームのカリフたることは、イスラームの「中心」たるメッカ、メディナ両聖都領有、信仰への保護、聖遺物の保有で十分な正統性があったはずであった³⁴。しかし「汎イスラーム主義」の「中心」としてのアブデュルハミト二世の正統性は大きく揺らいでいた。そのカリフは如何なるイメージで語られていたのか、戦前日本の雑誌に表れた記事³⁵を引用する。

帝は……内政上にも虐政を施して国政を退廃に導いたことは事実であつて、中世紀的といわれる帝の施政方針により、急速度に発展しつつあつたヨーロッパ近代

文明の移入を阻止することになったのであるが、しかし帝はまた国運の向上発展に心を致さなかつたとは言得ないのである。……兵制の改革、財政の刷新、文教の振興にも力を尽くした。……帝はまた一九〇〇年から七年の歳月を費し、ヒチアーズ鉄道を開設した。……目的は靈地メッカへの路面の近代化であつた。

右記事には、まず近代文明の移入を阻んだ中世的なスルタン像と、次いで鉄道敷設を含む改革刷新により近代化を図つたスルタン像の、相容れない二つのイメージが矛盾することなく同居している。しかし、スルタンは前者のイメージで語られることが多かつた。その容姿を揶揄するものからその専制・腐敗を指摘するものまで、⁽³⁶⁾スルタンへの否定的なイメージは幅広く存在してゐた。スルタンが実行する専制政治は、自身の臣民にも左記の史料⁽³⁷⁾のような反響を呼んでゐた。

〈先帝〉アブデュルアズイズは……カリフとしての影響力を高める最良の方法についてミドハト・パシヤに意見を求めた。これを受けてミドハト・パシヤは、帝国の行政を改善し、臣民の福祉や進歩を保全する方法を工夫することによつて、スルタンはムスリム世界だけでなくヨーロッパ列強の同情も得ることができよう⁽³⁸⁾と指摘した。他国のムハンマド教徒の間に、汎イス

ラーム主義運動を効果的に助成してゐると考えられてゐる現スルタンの、プロパガンダのための使節団や運動者を、人々がいかに重要なものと見做してゐるかをみると驚きを覚える。アブデュルハミトは、自身が直接統治するムハンマド教人種の間ですら、争いが起こるように企んでゐる。スルタンが影響力を高めるためにどのような方法をとろうとも、イスラーム主義 Islamism において、このカリフに値しないカリフの自己中心的なプロパガンダに耳を貸されるはずはない。

オスマン帝国臣民からのこの投書は、アブデュルハミト二世はその専制ゆえにカリフに不適當であると語つてゐる。「汎イスラーム主義」にとつてスルタン個人への批判は脅威であつたが、スルタンへの批判は何処からでも見られた。さらに、鉄道を含む近代化事業においても左記の様⁽³⁸⁾にスルタンは批判に曝されてゐた。

アブデュルハミト統治期に鉄道は少ししか発展しなかつた。これは主として彼の統治の腐敗した状況によるものである。スルタンが公共事業のほとんど全てに反対してゐたといふのは本当である。……スルタンが……自身の国が道路と鉄道のネットワークで覆われたのを見てみたいと語つたといふ事実にもかかわらず、

スルタン自身はそれらの建設への大きな障害であった。……スルトンの公務員は賄賂の獲得への自由が許されていた。……アブデュルハミトは、この習慣を終わらせる試みを何もしなかったことに対し責任がある。事実……スルタン自身も重要な（公共事業の）特許全てに支払われた大金の一部を得ているようだ。

しかしアブデュルハミト二世のもとで鉄道が大規模に発展したことは、鉄道を利用する意思が明白であったことは既述の通りである。こうした鉄道への評価は、スルタンへの否定的なイメージが事実を覆い隠した例である。³⁹一九〇〇年、ドイツ資本により建設された「アナトリア鉄道は、余が反動的、改革の敵であり、鉄道の国土への侵入を望まなかつたのだと語る者へ、余がこの逆であることを証明するのに最良である」と語り、スルタンは自身が近代技術に反対しているという言論を認識した上で、鉄道敷設の実績を以てこれに反論していた。さらにスルタンは「ヨーロッパとアメリカでの技術の進歩には余も感じ入っており、この観点から余らが彼らより一世紀遅れていることを認めている。しかし余の即位以前の状態と今日の状態は、公平に比較すれば……当然我々が発展を追求していると言われ得るのである」と考えていたのであった。⁴¹しかし、スルトンの主張はほとんど受け入れられていかなかったと言ってよい。

アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

むしろ、スルトンの主張とは真逆のスルタン像が「汎イスラーム主義」を阻害しており、スルタンはこのようなイメージとの戦いを強制されていた。

二、スルタン即位記念日とヒジャーブ鉄道開通式

近代において祝典が国民統合の為の機会となっていたことは明白であるが、本論では祝典のそうした内向的な側面よりも、国際社会という「空間」で自己の存在を確立させる、外向的な側面について検討したい。この時期のオスマン帝国の祝典は二つに大別することができる。一つはイスラームに関する祝典で、預言者の生誕や昇天を祝うもの、断食月に行うものがそれであり、イスラーム暦に準じて祝われることが特徴である。もう一つはスルタンに関する、つまり前者よりも世俗的な祝典で、スルタン即位記念日とスルタン誕生日がそれに当たる。こちらは西暦に準じて日にちが決められていた。⁴²どちらの祝典もオスマン帝国臣民には等しく祝われていたが、外国での言論において、これら二種類の祝典の間には明白な差異が存在していた。キリスト教国たる列強では、イスラームの祝典がイスタンブルで祝われていること自体は認識されていたが、⁴³政治的に顧みられることはほほなかった。⁴⁴一方で世俗的な祝典は、

はじめにで示した史料の通り、外国から特使が派遣されるなど政治的な注目が集まっていた。イスタンブルの祝典を間近で見ていたアブデウルハミト二世の娘・アイシエ皇女の回想録から確認できる、外国から特使が派遣されるような祝典はスルタン即位記念日のみであった⁴⁵。スルタン即位二五周年記念日についてのアイシエ皇女の回想⁴⁶に見えるスルタン即位記念日は、左記の様なものであった。

即位記念日の朝早く、父は大礼服を着てへウルドゥズ宮殿のシャールレ館へ出かけた。大臣、司令官、シェイヒユルイスラーム、総主教が来て、宮中朝食会の祝賀が行われていたようだ。私たちは：父の行進曲で開始されるこの儀式に来た人を眺めていた。：：食事の後、外国から父に与えられた勲章が御服係 *esvapçı* によって用意された。：：どの国の使節や大使が御前で謁見されるかによって、父は勲章を付け替えていたようだ。帝室音楽隊長サーデイ・ベイに式の数週間前、祝賀に訪れる国の国歌の譜が渡され、準備されていた。食事後、諸国からの使節がやってきはじめた。大使は古参の者から順にやってきていた。大使がやってくれば、その国の国歌が演奏された。：：シャールレ館から宮殿の外門まで軍隊が敬礼していた。この式典は夕暮れになるまで続いた。

右記録からは、各国の国歌が効果的に用いられ、外国大使への謁見もあり、即位二五周年記念日が国際的であったことが分かる。イスタンブル市内では大規模なイルミネーションが行われ⁴⁷、オスマン語新聞第一面にはスルタンを讃える文章が凝った装飾と共に書かれていた⁴⁸。また既述のように、様々な公共事業によっても祝われていた。イギリスからはヴィクトリア女王の親書奉呈の為に駐イスタンブル大使の他に特使が派遣され、さらにイギリス地中海艦隊も満艦飾でスルタン即位を祝賀していた⁴⁹。ブルガリアは主要閣僚のほとんどをイスタンブルに向かわせていた⁵⁰。主要国ではオーストリア・ハンガリーだけが大使のみを派遣したが、同国大使は諸国の使節の代表としてフランツ・ヨーゼフ皇帝の名でスルタンに感謝の辞を述べた⁵¹。即位二五周年記念日はさらに、ブルガリア領東ルメリ、イギリス領セイロンでもイルミネーションやスルタンへの寄附、学校の起工式で祝われていた⁵²。パリでは反スルタンの青年トルコ人が列強の祝典参加に抗議し⁵³、イギリスではこの祝典を機にスルタンの暴虐に抗議する投書も行われていたが⁵⁴、ドイツではスルタンの善政を讃える新聞記事が現れ⁵⁵、イギリスにおいてすら「スルタンに個人的責任がある、嘆かわしいさる事件による激しい偏見と誤解は乗り越えられた⁵⁶」という好意的な言論も見られた。イギリスのタイムズ紙、ロシア

のノーヴァエ・ヴレーミヤ紙などを見ると、即位二五周年記念日は祝典そのもののみならず、オスマン帝国と諸外国との交流（これには帝国外ムスリムの示した祝意も含まれる）帝国での公共事業、スルタンへの評価など、多様で詳細な記事が掲載される機会となっていたことが分かる。「中心」たるスルタン個人に対し否定的な言論が形成されていた事は前章で既述の通りであるが、即位二五周年記念日には普段とは違う言論が表れていた。特にこの日に近代的事業の実行が示されたことは注目に値する。

一八七六年九月一日のアブデュルハミト二世のスルタン即位以降、この日を記念日とする祝典が創造されたのは即位一〇周年の一八八六年であった⁽⁵⁷⁾。この年の祝典は駐イスタンブル大使館の主席通訳官が祝意を奉ずる程度の、小規模なものであった。この様に、アブデュルハミト二世統治時代の前期、スルタン即位記念日はまだ国際的な注目を集めていないのであった。しかし一八八六年以降、即位記念日の露出は増えていった。一八八七年には、ブルガリア政府が在ソフィアのオスマン帝国代表部を訪問して祝意を伝達し、こうした行動は今後も定期的に伝えられている⁽⁵⁸⁾。一八九〇年にはアルメニア系臣民代表がスルタンに謁見し、クレタ島暴動の首謀者が恩赦されている⁽⁵⁹⁾。この様にアブデュルハミト二世統治時代の中期は、帝国内の少数集団

であるアルメニア、ギリシア、さらにはブルガリア系臣民にスルタンの温情を示す為⁽⁶⁰⁾に即位記念日が機能していたと見ることが出来る。従って、即位記念日は国内少数派への配慮をスルタン個人と結びつける意味合いが強かった。こうした傾向が劇的に変化するのは、一八九七年、オスマン・ギリシア戦争の戦勝年に行われた即位記念日である。この年の即位記念日の数カ月前、クレタ島を巡って対立した両国は開戦し、結果はオスマン帝国の電撃的勝利に終わっていた。即位記念日に際してブルガリア系臣民の政治犯が釈放され⁽⁶¹⁾、アルメニア系臣民代表がスルタンに寛大な統治を感謝するなど、従来同様の儀式が行われたが、⁽⁶²⁾ 戦争は即位記念日に新たな色彩をもたらしていた。戦争記念章の叙勲が行われ、ギリシアとの国境付近の駐サロニカ軍からの祝賀電報に「スルタンは自身が即位して二〇年の間で記念日がこのような幸福な賛助を得て祝われたことはなく、これは最近の軍事行動の成功に負うところ大である」と返答した⁽⁶⁴⁾。帝国にとって久々の戦勝に沸いた本年の即位記念日には、国際的な注目が集まっていた。遠く離れた日本の新聞でスルタン即位記念日に関する記事が初めて現れるのも、この年である⁽⁶⁵⁾。戦勝によって近代化政策の成功が示されたという点で本年の即位記念日は、同じく近代化政策の実行が示された一九〇〇年の即位記念日のプロトタ

イプと見做し得るものであった。スルタン個人の記念日であり、列強の注目の集まる即位記念日に近代化事業の進展の証拠を示すという行為は、一九〇〇年以降も続けられている。一九〇二年にはイスタンブルでドイツの協力による医学校が開校し、オスマン軍将校にドイツの勲章が贈られた。⁶⁶ 帝国全土では官僚への給料支給、学校やモスク、橋、兵器廠の落成があった。⁶⁷ 大規模な恩赦が行われ、正教の総主教は友好を呼びかけ、⁶⁸ スルタンの温情も示されていた。新世紀に入ると「街には旗が掲げられ、また飾り付けがなされた。夕方には好天に恵まれて、素晴らしいイルミネーションがあった」⁶⁹ など即位記念日の様子を伝える記事がより高い頻度で表れはじめた。つまりそれだけ、スルタンが自国で行っている近代化政策が国際「空間」に露出していたのであった。

ヒジャーズ鉄道の開通式も、この文脈の中にあるであろう。一九〇二年の即位記念日に関する記事には「ダマスクスから州総督は、即位記念日に際して首長とウラマーが集合する中でヒジャーズ線のダルアー、ザルカーまでの区間が晴れやかに開通したと電信した」とあるが、同鉄道の開通と即位記念日は他の公共事業と同列に語られていた。⁷⁰ 翌年には同様に、同鉄道の通常運行開始が示されている。⁷¹ 一九〇五年には同鉄道沿線の街マアーンでの開通式が報道

され、一九〇七年には遂に聖地目前のアル・ウラーまでの開通が公式に示された。⁷² ヒジャーズ鉄道開通式は一九〇二年の記事にある様に、在有力者の参加を得て盛大に行われていた。この祝典の規模が最大になったのは、一九〇八年の全線開業祝典であった。イギリスでは、即位記念日とヒジャーズ鉄道開業はメデイナで、スルタンの名代で宗務の長であるシェイヒユルイスラームが臨席のもと、出来る限り最高の祝典をもって祝われるであろうと囁かれていた。同時に、鐵路がメッカに到達した暁にはスルタン自身が祝典を主宰するであろうとも語られていた。⁷³ しかし青年トルコ人革命により、即位記念日の約一カ月前にスルタンは憲法の復活を宣言、自由な雰囲気の中でスルタンの権限は弱められることになった。この年の即位記念日は、それにもかかわらず盛大であった。イギリス国王からは憲法復活後初の即位記念日に対し祝電が打たれ、⁷⁴ 帝国各地の臣民は平年以上の熱狂で立憲君主への忠誠を示し、⁷⁵ スルタンは祝典で盛んに憲法擁護の演説を繰り返した。⁷⁶ 憲法という近代性をスルタン個人と結び付ける努力が行われている点から見て、体制変換後も即位記念日の有り方は変わらなかつたようである。同日のヒジャーズ鉄道開通式もシェイヒユルイスラーム派遣などのイスラーム的色彩は減ったが、盛大であった。開通式の為の使節団長はダマスクスでシリア

州総督、駐ダマスカス軍司令官、鉄道技師長、建設局長と合流し、同地で多数の名士・民衆を交えた祝典を張った。その後、駅での榮譽礼を受けつつ使節団は特別列車でダマスカスを出発した。道中の各駅では官僚と地元民が特別列車を出迎えており、⁽⁷⁸⁾特別列車は「勝利の行進にも似ており：新立憲制時代への熱狂が示されていた。路線全駅はオスマン語で「自由・平等・博愛」と書かれた旗で華々しく飾られ、鉄道での業務に従事する諸兵は紅白の帽章を着けていた」⁽⁷⁹⁾。特別列車の蒸気機関車にも旗などで装飾があった⁽⁸⁰⁾。シェイヒユルイスラムが使節団長であればまた別種の興奮があつたろうが、興奮という意味では立憲制的色彩においても同じであつた。それはメディナでの開通式における建設局長の演説に示されている。

オスマン人やムスリムは鉄道建設への高い評価に値するものであります。……事業の実現可能性についても、躊躇する者や疑念を持つ者が支配的でありましたが、今や我々はオスマン帝国の根気への力強い称賛を耳にするに至っているのであります。この路線のおかげで：祖国の富が増すことで、多くの心に宿る聖なる志を満たすであろうことを信じるに十分な理由を我々は見いだせるのであります。実に、我々が愛すべき国、我々が尊敬すべきカリフを祝い、祖国と陛下が

— アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国 —

文明化と人間性の称賛すべき勝利に対してより相応しくあるべきことを祈るものであります。祖国万歳！

正義、自由、カリフ万歳！

聖都メディナの預言者の墓での礼拝から始まった開通式は、駅での祝典でクライマックスを迎えた。市民、名士、世界各地からの巡礼者、列強の新聞記者、整列した兵士に囲まれた駅では軍楽隊がハミデイエ行進曲を演奏し、再び礼拝が行われた⁽⁸²⁾。その様子は写真A⁽⁸³⁾に示す通りである。様々な演説の最後に使節団長が「スルタンの高貴なる名前のもとに、余は鉄道開通を宣言する。自由万歳、祖国万歳、スルタン万歳！」⁽⁸⁴⁾と述べた後もイルミネーションや花

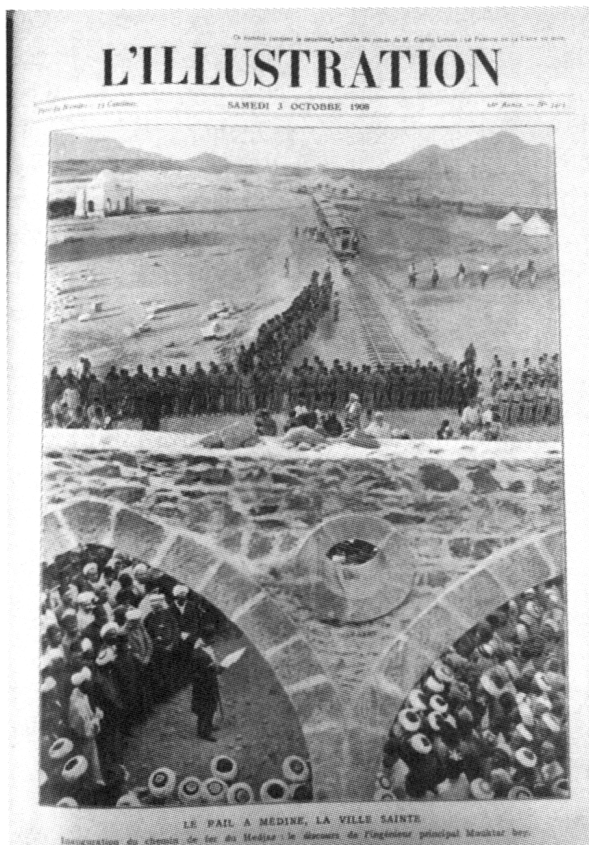


写真 A

火などで祝典は続いた。帝国外でも鉄道開通が祝われ、インドではこの日を祝日にすらしていた。⁽⁸⁵⁾ 開通式の演説では、スルタンが並置すべきでないとした愛国心とカリフへの尊敬が並立していた。こうした変容はあるものの、鉄道、自由といった近代性がスルタン個人とも結び付けられていた。そして、こうした出来事は非ムスリムである列強の記者を聖都に招くことで大新聞でも報道されていた。

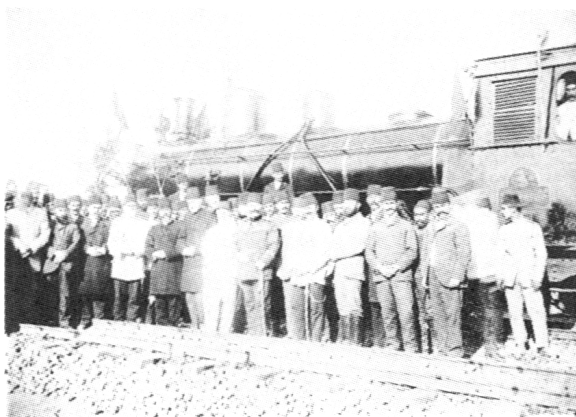
最後に、ヒジャーズ鉄道の「行列」としての役割を検討したい。ヒジャーズ鉄道開通のはるか前、セリム一世時代から、メッカへのスルタンの贈物を届ける使節、ないしは御輿であるスツレsureが、オスマン帝国の「中心」たる帝都⁽⁸⁶⁾と聖都を結んでいた。

スツレ使節団長に御輿と委託品が渡されてからユルドゥズ坂で行列が立てられる。……聖御輿は大きく、飾り立てられたラクダの背に置かれ、その飾緒がその年のスツレ使節団長である人に渡される。行列は、宮殿の門の前をまわって宮廷府の前を抜けていた。行列の前では全員が黒人で、ハッキヤームHakkamと呼ばれる男たちが大太鼓を叩いて剣盾の舞を演じ、軽業をしてその技巧を示していた。……御輿がユスキュダール⁽⁸⁷⁾へ向かうと大砲が撃たれた。

右記の⁽⁸⁷⁾様に帝都を発したスツレは、道中のダマスクスで

も「民衆はみな市場や道路、商店に集まって大いに歓喜し、預言者のために祈り、日夜を問わず今上カリフの治世が続くように祈る」⁽⁸⁸⁾など、その興奮を運ぶとともに帝都のスルタンへの尊敬も運んでいた。スツレはまさに「行列」であった。こうした性質はスツレと同じ道を巡回するヒジャーズ鉄道においても同様であった。一九〇八年の開通式に際して、スルタンの名代たる使節団は装飾された路線を通り、装飾された列車に乗って聖都に到達した。その蒸気機関車には写真B⁽⁸⁹⁾で分かる様に、側面に日本では菊の御紋に当るスルタンの花押が嵌め込まれていた。また蒸気機関車に国旗が掲揚されることもしばしばであった。レールには「信徒の長、ガー

ズイ・スルタン・アブデウルハミト二世可汗陛下の大きいなる援助で建設された聖なる施設である」と刻印され⁽⁹⁰⁾、ダマスクスとメディナには、写真C⁽⁹¹⁾と写真D⁽⁹²⁾で見えるように、巨大で壮麗な駅舎が出現した。開通式では行進曲も奏され、同鉄道



写真B

は視覚的にも聴覚的にも、そうした事業を行った帝都にいるスルタンへの感銘を起こさせるものであった。やがてスツレはヒジャーズ鉄道で運ばれるようになるが、同じ巡礼路をゆく新旧二つの「行列」は、共に沿道の臣民に「中心」を意識させる装置であったと考えられる。

おわりに

それでは、これまでの検討から問題に答えることとしたい。

まずスルタン即位記念日とは、オスマン帝国にとって世



写真 C

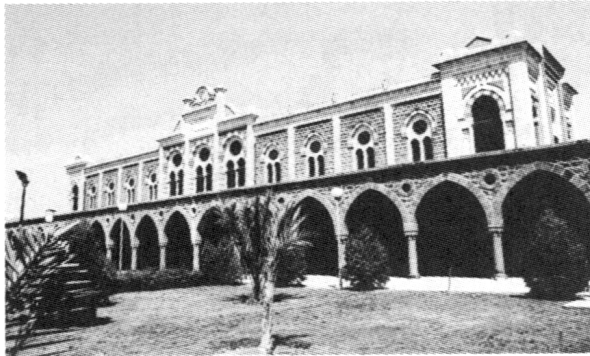
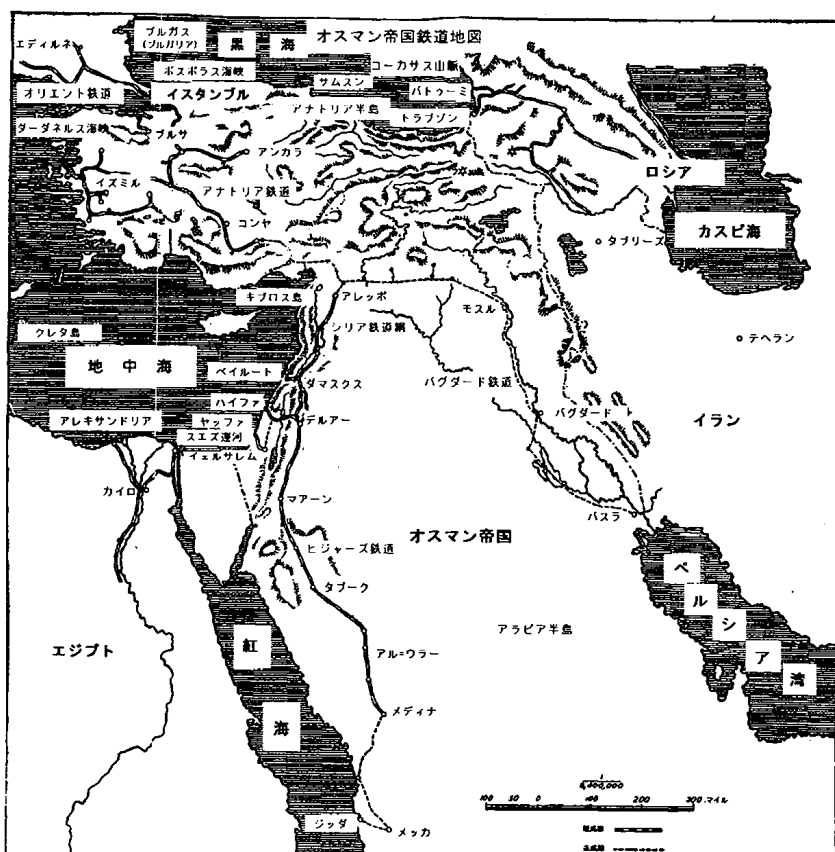


写真 D

俗的な、アブデュルハミト二世にとって個人的な記念日である。この祝典は、スルタンが近代化事業を推進していることを国内外の「空間」に示す機会を提供していた。そしてヒジャーズ鉄道開通式とは、スルタン即位記念日に提供される近代化事業の一例であり、かつ「中心」たるスルタンを「行列」によって臣民に示す祝典でもあった。鉄道が近代化事業であるが故に、開通式は即位記念日に行われる必要があった。

こうした祝典を行うことで、スルタンが期待できた利益は以下の通りである。つまり、スルタンは「汎イスラーム主義」の「中心」でありながら、近代化事業に反対して適切な国家運営を行っていないことなどを理由に批判されていた。スルタンにとって自身を「中心」とする国体の護持は優先課題であった為、自政権の正統化の必要があった。そこでスルタンは、近代化事業の成果を示すという意味を持った即位記念日の祝典を世紀転換期に創造し、併せてヒジャーズ鉄道開通式を行った。こうすることで、近代化事業に反対しているはずのアブデュルハミト二世個人と近代化事業が結び付けて宣伝され、批判が解消されるであろうというものが、スルタンの目した利益であった。その達成如何はここでは問題ではない。スルタンが本件に示した強い関心は、スルタンが目標達成を期待していたことを明白



地図

に示している。

これまでの検討の中で、今後の課題となるものは少ない。例えば、当時のエピステーメー⁹⁴の中で鉄道のなかった帝国、鉄道を自力で敷いた帝国、そして古来よりのイスラム文化を擁する帝国を、スルタンを含めたオスマン人がどのように位置づけていたのかは、近代における文明の意味付けを知る上で重要な課題である。近代技術に対してどのような見方をオスマン人が持っていたのかもさることながら、国民国家建設において重要な祝典の、より外向的な側面についての検討も今後進めてゆく必要がある⁹⁵。さらに、鉄道の「行列」的性格についてスツレという中世的な儀式との連関で述べた。伝統を創造すると言うと、伝統が新造されたという側面に目が行きがちである⁹⁶。しかし、近代以前の仕組みに極めて近代的な技術が接ぎ木され、新たな意味付けがされる側面にこそ注目すべきである。

註

- (1) Ochsenwald, William, *The Hijaz Railroad*, Charlottesville, 1980 & Gülsoy, Ufuk, *Hicaz Demiryolu*, Istanbul, 1994 & Özyüksel, Murat, *Hicaz Demiryolu*, Istanbul, 2000 & Hülügü, Metin, *Bir Umudun İnşası Hicaz Demiryolu*, İstanbul, 2008. が挙げられる。なお、アラビア語やヘブラ

イ語、もしくはアラブ人やイスラエル人による英語の研究を見出すことは筆者の言語力不足と調査力不足によりできなかった。

- (2) 本表は Gilssoy, op. cit. & Wasfi, Syed Tanvir, "Muhammad Inshaulah and the Hijaz Railway", *Middle Eastern Studies*, 34-2, p.60-p.72, 1998. を参照して作成した。論文末の地図も適宜参照されたい。地図は The Times, 1908. 9. 2, p.8, 38741. 掲載のものを修正した。以降、The Times は T と略記する。

- (3) T, 1902. 11. 19, p.13, 36929.

- (4) 『外交時報』三二三四（三三五頁）一九〇〇・一一。
なお本記事は T, 1900. 8. 31, p.3, 36235. の翻訳であると思われる。大学校とは一九〇〇年に改めて成立した近代的大学である帝室大学、ドイツ皇帝寄附の噴水池とは翌年のカイゼル誕生日に落成した泉、電信とはスルタンのヒジャーズ鉄道建設の勅令発布の前日に完成したメッカへの電信線のこと。また、以降、本文中の〈 〉は筆者註を示す。

- (5) 近代オスマン帝国の即位記念日に関する研究としては Karateke, Hakan T., *Padisahlm Çok Yasal: Osmanli Devletinin Son Yüz Yılında Merasimleri*, Istanbul, 2004. が挙げられるが、即位記念日への注目は即位元年の式典に集まっております、ヒジャーズ鉄道との関わりは考慮されてい

アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

い。

- (6) ホブズボウム、エリック「伝統は創り出される」『創られた伝統』（九一―二八頁）紀伊國屋書店、一九九二。つまり、エリック・ホブズボウムが近代のナショナリズムを相対化するために考え出した、伝統という歴史に根ざした（ように見える）一連の象徴が、絶えず変革する近代のなかで価値や規範を位置づけるために用いられる、という概念である。

- (7) ハーバース、ユルゲン（訳、細谷貞雄）『晚期資本主義における正統化の諸問題』岩波書店、一九七九&ヴェーバー、マックス（訳、世良晃志郎）『支配の諸類型』創文社、一九七五。両者の研究に依拠すれば、このあまりにも有名な概念は、改めてこの様なものであると表現できる。つまり、正統化とは、社会の同一性崩壊の危機を回避するために、社会の同一性を社会の担い手自身に支持させるための動機づけである。正統化の行為主体は、エリートである場合もあれば、民衆である場合もある。これの発現形態のひとつが伝統の創造であると言える。

- (8) Özbek, Nadir, "Philanthropic Activity, Ottoman Patriotism, and the Hamidian Regime, 1876-1909", *International Journal of Middle East Studies* 37, p.59-p.81, 2005 & Deringil, Selim, "Legitimacy Structures in the Ottoman

- State : The Reign of Abdülhamid II, 1876-1909”, *International Journal of Middle East Studies*, 23, p.345-p.359, 1991. 近代オスマン帝国史研究の動向については 秋葉淳「近代帝国としてのオスマン帝国」『歴史学研究』七九八(二二二—二〇頁) 二〇〇五。
- (9) Geertz, Clifford, “Centers, Kings, and Charisma : Reflections on the Symbolics of Power”, *Culture and Its Creators : Essays in Honor of Edward Shils*, ed. Ben-David, Joseph & Clark, Terry Nicholas, p.13-p.38, Chicago, 1977. 「中心」が原文では Centres である点にも注目したい。
- (10) 渡辺浩『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七。
- (11) 石井規衛「演劇空間としてのロシア革命」『岩波講座世界歴史二七：ポスト冷戦から二一世紀へ』(二二—二一七—三二七頁) 岩波書店、二〇〇〇。舞台の装置とは、中心では「中心」「行列」として換言可能であろう。
- (12) Sultan Abdülhamid, *Siyasi Hatıratım*, İstanbul, 1974, p.123-p.124. メッカ線とはヒジャーズ鉄道の事であり、同鉄道は当初、メッカまで達する予定であった。
- (13) Abdülhamid, op. cit., p.145.
- (14) 小松香織「オスマン海軍の一九世紀：近代化をめぐる」『講座岩波世界歴史二一：イスラーム世界とアフリカ』岩波書店、一九九八(二一四—二一五)。
- (15) Abdülhamid, op. cit., p.144-p.145.
- (16) Z., “The Hedjaz Railway”, *The Spectator*, p.148-p.149, 1905. 7. 29.
- (17) T., 1906. 5. 26, p.8, 38030. ユルドゥス派閥 (Yıldız clique) とは、アブデュルハミト二世の宮廷府のあったユルドゥス宮殿にいる、スルタンの取巻き連中といった意味であろう。
- (18) 赤川元章「第一次大戦前におけるオスマン帝国の対外的経済関係」『三田商学研究』二四—六(二〇—三八頁) 一九八二。一八八一年にはイギリスはオスマン帝国債保有率二位であり、五位のドイツは遠く及ばなかったが、七年後にはイギリスは四位に転落し、ドイツが三位になっている。以降、その差は開いていくことになる。
- (19) 赤川元章「オスマン帝国におけるドイツ金融資本の鉄道事業について」『三田商学研究』二五—五(二二—三一—四四頁) 一九八二。一八八〇年から一九〇〇年までの二〇年間でオスマン帝国の鉄道総延長は約三倍に達し、ドイツ資本の投下の多かったアジア領では約七倍にも達した。 *Archiv für Eisenbahnwesen*, Berlin, 1912, p.552-p.555.
- (20) カイゼルは一八九八年の訪土時に、有名な「世界の各地に散在して陛下を中心の聖主と仰ぐ三億の回々教徒は希く

は確信せよ独逸皇帝は総べての時に於て彼等の好友たるべきを」という演説を行っている。「独逸の対土耳格政略」

『外交時報』二二二二(二二六—二七頁)一八九九・一。

- (21) T, 1908, 9. 5, p.5, 38744. 本記事はタイムズ紙がドイツのフォス紙の記事の翻訳として、ベルリンから発したものである。

(22) Z, ibid.

- (23) Landau, Jacob M., *The Hejaz Railway and the Muslim Pilgrimage : A Case of Ottoman Political Propaganda*, Detroit, 1971, p.148. 本史料は、反ビジャース鉄道言論封殺

と同鉄道宣伝を目的として作成された。Muhammed Arif, *al-Sa'ada al-namiya al-abadiyya fi l-shikha al-hadidiyya al-Hijaziyya*, Istanbul, 1900. の英訳の和訳である。砂漠を長時間横断する巡礼路は湯水だけでなく、遊牧民による略奪という危険もあった。ベル、G・L(訳、田隅恒夫)『シリア縦断紀行2』平凡社、一九九四(二〇二—二〇三頁)。

(24) Gülsoy, op.cit., p.58-p.84.

- (25) とは言え、オスマン帝国内では官僚の給料天引きなどの形で寄附が供出される例もあり、またオクセンヴァルトは、領収書からはムスリムが自発的に寄附を行ったかどうかは判別できないとして、寄附の自発性に疑問符をつけている。Ochsenwald, op. cit., p.59-p.88. また、地域内での役

アブデユルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

畜輸送を行い、さらに中央政府の権力強化を嫌うアラブ遊牧民の反発もあったが、同じアラブでも都市民は同鉄道を支持していた。ベル、前掲書(二〇三—二〇四頁)。

(26) Gülsoy, op. cit., p.104-p.106.

- (27) Бартольд, Василий Владимирович, "Панисламизм", *Сочинения VI : Работы по Истории Ислама и Арабского Халифата*, Москва, 1966, p.400-p.402.

(28) 新井政美『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』青土社、二〇〇九(一七七—一八八頁)。

(29) Abdülhamid, op. cit., p.178.

(30) Abdülhamid, op. cit., p.180-p.181.

- (31) Abdülhamid, ibid. オスマン帝国のスルタン (Osmanlı Padişahı = オスマン皇帝)、イスラームのカリフ (Emir-ul-Müslimin = 信徒の長) は意識である。オスマン帝国のスルタンがイスラームのカリフたることは、一七七四年の露土戦争の講和条約中に初めて国際的に認知される形で明記され、さらに一八七六年発布のオスマン帝国憲法中にも明記されていた。Özcan, Azmi, "İttihād-ı İslām", *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi*, 23, İstanbul, 2001, p.470-p.475.

(32) 新井政美『トルコ近現代史：イスラム国家から国民国家へ』みすず書房、二〇〇一(八四—一一二頁)。

- (33) Abdülhamid, op. cit., p.178. 彼の言葉に近い表現でイギリスが懸念を示している記事には「スルタンがカリフであれば、エジプトだけでなくその他すべての国のムハンマド教徒はスルタンの命令に従い統治者と戦う義務が生じるであろう。それ故、ムハンマド教徒住民のいる国全てにとって、究極的には、カリフ位についてのアブデュルハミットの要求は断固として受け入れるべきでないことである」というものがある。T, 1906. 8. 18, p.4, 38102.
- (34) T, 1906. 8. 28, p.6, 38110.
- (35) 徳川家正「日土修好五十年に当りて：アブデュル・ハミット二世を憶ふ」『回教圈』三三三・四（二一―二二頁）一九三九。
- (36) An Ex-Attache in the Turkish Foreign Office, "Abdul-Hamid, The Man: His Character and His Entourage", *The Pall Mall Magazine*, 1903. 6., p.261 & Lyle, Eugene P. Jr., "Islam's Pope", *The Idler, an Illustrated Monthly Magazine*, 1901. 12., p.416.
- (37) T, 1901. 9. 18, p.8, 36563.
- (38) Pears, Edwin, *Life of Abdul Hamid*, London, 1917, p.165-p.166.
- (39) もっとも、オスマン帝国において汚職は日常茶飯事であった。また専制的であるという評価も、出版への締め付
- けなく見れば妥当なものである。
- (40) Abdülhamid, op. cit., p.100.
- (41) Abdülhamid, ibid.
- (42) Murray, John, *Handbook for Travellers in Constantinople, Brusa, and the Troad*, London, 1907, p.12-p.13 & Coufopoulos, Demetrius, *A Guide to Constantinople*, London, 1910, p.49-p.51. & 山田寅次郎「絶食祭」『土耳其画観』博文館、一九一（二〇―二二頁）。& Wasti, Syed Tanvir, "The Ottoman Ceremony of the Purse", *Middle Eastern Studies*, 41-2, p.193-p.200, 2005. またオスマン帝国では太陰暦のイスラーム暦と、太陽暦のルーミー歴という二つの暦を併用していた。定期刊行物にはルーミー歴で日付が書かれ、地方でもルーミー歴は使用されていた。ベル、前掲書（九四頁）。
- (43) T, 1879. 9. 27, p.8, 29684. 彼の記事ではオスマン帝国の多様な祝典について紹介がなされている。
- (44) Karateke, op. cit., p.40-p.45.
- (45) Osmanoglu, Ayşe, *Babam Sultan Abdülhamid*, Ankara, 1986, p.67-p.68 & p.79-p.80 & p.97-p.98. 外国使節が登場する祝典に、宗教的祝典である砂糖菓子祭に伴って行われる帝室朝見会があるが、この式典へ列強が特使を立てたという記事は、少なくともタイムズ紙には見当たらない。オス

マン帝国では宗教的式典でも「スルタン陛下万歳」と歓呼させているなど、近代的な色彩を帯びさせようと努力していた様子があるが、国際社会に表出するものではなかった様である。また、この回想録にはスルタン誕生日についての記事が無い。タイムズ紙にも、スルタン誕生日の記事は僅かしか見られない。スルタン即位記念日と同様にスルタン誕生日も祝われていたのかどうかは、今後の研究の課題としたい。

(46) Osmanoglu, op. cit., p.83-p.84. 「父の行進曲」とは恐らく、オスマン帝国における国歌のような意味付けを持った、アブデュルハミト二世の名前を冠した「ハミディエ行進曲」であろう。オスマン帝国では「国歌」は作られず、今上スルタンを讃える行進曲が代りに作られていた。

(47) T, 1900. 9. 3, p.4, 36237.
(48) MaJumât, 1900. 9. 1, p.1, 1183 & Tercüman-ı Hakikat, 1900. 9. 1, p.1.

(49) T, 1900. 8. 28, p.3, 36232 & 1900.8.31, p.3, 36235.

(50) T, 1900. 8. 31, p.3, 36235.

(51) T, 1900. 9. 3, p.4, 36237 & T, 1900.9.5, p.4, 36239.

(52) T, 1900. 8. 31, p.3, 36235 & 1900.9.3, p.4, 36237.

(53) T, 1900. 8. 31, p.3, 36235.

(54) “The Sultan’s Jubilee”, *The Review of Reviews*, p.216-

アブデュルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国

p.217, 1900. 9.

(55) T, 1900. 9. 1, p.4, 36236.

(56) *The Saturday Review*, p.287, 1900. 9. 8.

(57) T, 1886. 9. 1, p.10, 31853. もともと、即位五周年の一八八一年には祝典の開催が計画されていたが、諸般の事情により実施されなかった。即位五周年記念日祝典には「列強の代表を招いた大夜会を開く」など、国際的な色彩を帯びさせようとしていた様である。T, 1881. 9. 6, p.3, 30292.

(58) T, 1887. 9. 2, p.3, 32793 & 1890. 9. 1, p.3, 33105. と同じく、こうしたブルガリア政府の行動は興味深いものであるように思われる。ブルガリアは公式にはオスマン帝国の宗主権下にあったが、実質的には全くの独立国であった。即位記念日に際して祝意を伝達するというのは、オスマン帝国を外国として見做し、外交儀礼の文脈で処理していたのか、それともオスマン帝国に対する属国としての礼儀の文脈で処理していたのかによって、意味付けが全く変わってくる。本件の検討も、今後の課題とする所である。

(59) T, 1890. 9. 2, p.3, 33106. アルメニア系臣民はロシア国境付近に住むキリスト教徒で、アブデュルハミト二世はこの民族を虐殺しているとして非難されていた。

(60) T, 1890. 9. 4, p.5, 33168. クレタ島での暴動の首謀者とは、

ギリシア系臣民のことであろう。オスマン帝国領クレタ島のギリシア系臣民は、ギリシア王国への編入を望んでおり、このことが後にオスマン・ギリシア戦争に発展した。

- (61) Hoboe Время, 1897. 9. 1. 7715. 以降 'Hoboe Время' は HB と略記する。
- (62) T, 1897. 9. 4. p.3. 35300.
- (63) もっとも、温情が示されるばかりでなく、この頃に頻発していたアルメニア人のテロを警戒する様子や、青年トルコ人の疑いがあるものの拘束も行われていた。HB, 1897. 9. 2. 7716 & T, 1897. 9. 4. p.3. 35300.
- (64) T, 1897.9.2. p.3. 35298.
- (65) 『東京朝日新聞』四〇二四号（二頁）一八九七・九・七。
- (66) HB, 1902. 8. 30. 9501.
- (67) HB, 1902. 9. 5. 9507.
- (68) HB, 1902. 8. 30. 9501.
- (69) T, 1903. 9. 2. p.3. 37135.
- (70) HB, 1902. 9. 5. 9507.
- (71) HB, 1903. 9. 3. 9864. もっとも、即位記念日ないしはヒジャーズ鉄道開通式について、列強の大新聞といえども毎年必ず触れていたのではない。一九〇四年のように前帝ムラト五世の死去に報道が集中した場合もあれば、一九〇一年の様に全く報道がない場合もある。
- (72) T, 1905. 9. 1. p.5. 37801.
- (73) HB, 1907. 9. 5. 11295.
- (74) T, 1907. 12. 28. p.6. 38528.
- (75) 『東京朝日新聞』七九三二号（二頁）一九〇八・九・一九。
- (76) T, 1908. 9. 2. p.5. 38741 & 1908. 9. 2. p.5. 38741 & HB, 1908. 9. 4. 11654.
- (77) T, 1908. 9. 3. p.4. 38742.
- (78) T, 1908. 8. 28. p.5. 38737.
- (79) T, 1908. 9. 2. p.5. 38741.
- (80) L'Illustration, 3423, p.2, 1908.10. 3.
- (81) T, 1908. 9. 8. p.3. 38746. この演説には帝国内の鉄道が外国資本で敷設される中、自国民の手で鉄道を敷設し得たという自負が見て取れる。その自負がその後の帝国臣民の意識に影響したかどうかは、今後の研究の課題である。小松香織「オスマン帝国の経済ナショナリズムに関する一考察」『東洋史研究』七一一（一一―三五）二〇一一。
- (82) T, 1908. 9. 3. p.3. 38742.
- (83) L'Illustration, 3423, p.1, 1908. 10. 3. 軍隊は駅の柱の陰に隠れているが、かろうじて姿を確認できる。写真手前で紙を読み上げているのは建設主任技師である。
- (84) T, 1908. 9. 8. p.3. 38746.
- (85) T, 1908. 9. 3. p.3. 38742.

- (86) 大宰相がロシア侵略への備えとして、アナトリア半島のブルサへの遷都を進言した際、スルタンは「イスタンブールを失うことでカリフ位も我々は失い、カリフ位は確実にアラブ人の手に渡ることになる」として反対し、カリフ座たるイスタンブールは何よりも重要であると発言した。
Abdülhamid, op. cit., p.77.
- (87) Osmanoğlu, op. cit., p.67-p.68.
- (88) Landau, op. cit., p.74.
- (89) *Hicaz Demiryolu Fotoğraf Albümü*, İstanbul, 1999, p.36.
一九〇五年撮影。ただし何の機会の写真なのかは不明である。
- (90) *Hicaz Demiryolu Fotoğraf Albümü*, İstanbul, 1999, p.122.
- (91) http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Damascus-Hejaz_station.jpg (110131・111・五閲覧)。
- (92) Nicholson, James, "The Hejaz Railway", *Asian Affairs*, 37-3, p.334, 2006.
- (93) Buzpinar, Şit Tufan, "Surre", *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, 37, İstanbul, 2009, p.567-p.569. 聖御輿の載った汽車にどの様な聖性が付与されていたのかは、今後の研究で解明すべき事である。
- (94) フーコー、ミシェル (訳、中村雄二郎) 『知の考古学』河出書房新社、一九八一 (二九〇頁)。改めて表現すれば、
アブデユルハミト二世と世紀転換期のオスマン帝国
- エピステーメーとは、一定時代における個々人の思考を志向させる知的な基盤である。
- (95) 長谷部圭彦「臣民から国民へ…オスマン帝国の二重のナショナリズム」『西洋史論叢』三四、二〇一二 (二九—四六頁)。
- (96) 小原淳「ナショナリズム研究再考…その成果と課題」『西洋史論叢』三四、二〇一二 (二一九頁)。